ぶっくレビュー

『アメリカ食肉産業と新世代農協』

大江徹男著（日本経済評論社）

米国の農業や食品産業では、近年「静かな革命」と呼ばれるほどの急激な構造変化が伝えられている。本書は、この「革命」の象徴的存在である養豚産業に焦点を当て、その実態解明を行うとともに、そうした過程で設立が進んでいる「新世代農協」の現状と可能性を明らかにしたものである。

本書は、二部一〇章で構成されている。まず序章では、本書のキーワードである「垂直的調整」や、農協をめぐる論点が批判的に検討されている。垂直的調整とは、契約関係を通じて生産・流通の各主体を結合する「継続取引」を指す概念であるが、生産・加工面での技術革新や健康志向の消費者ニーズを背景に、この垂直的調整が近年急速に浸透し、各段階毎の相互依存が深まるという新たな局面を迎えている。その際、問題となるのが、契約関係の浸透に伴う生産者の独立性への影響である。取引費用論に基づく従来の研究では、契約によって取引主体間の関係が次第に「対立から調整へ」向かうと処理されてきたが、著者は、こうした見解が「調整」の主体や参加者の具体的分析を欠いたものだと批判する。そして、①調整主体であるパッカーの事業戦略分析と、②調整参加者である生産者側からみた契約関係の構造分析、という二つの分析視角を設定して、パッカー主導の垂直的調整の実像に迫ろうとする。また、後者については、契約に不満足な生産者が農協を新設して独自の垂直的調整を試みている点にも注目し、現行の垂直的調整の評価基準に加えている。

以上の分析枠組みを基に、本論では二つの課題について実証作業がなされている。第Ⅰ部のテーマは、パッカー主導の垂直的調整についてであり、先端技術導入に伴う生産構造変化（第一章）や、寡占化へと向かうパッカーの事業戦略（第二章）を検討した後、契約生産（第三章）や販売契約（第四章）の構造・問題点が明らかにされる。第Ⅱ部では、新世代農協に焦点が当てられ、その特色・背景を概観した後（第五章）、牛肉産業の事例（第六章）と養豚産業での既存農協の変化（第七章）、さらには地域レベルでのネットワーク展開の可能性（第八章）が論じられている。

本書の意義は、米国養豚産業の急激な構造変化を、豊富な統計資料と綿密な現地調査によって包括的に描き出した点が、まず挙げられる。中でも、実際の契約文書を基にパッカー主導の調整内容を検討した箇所は、畜産公害やパッカー規制の検討とあわせて、従来の取引費用論の静態的分析を乗り越える豊富な論点を提供してくれている。

もう一つは、パッカー主導の垂直的調整に対する生産者側の対抗策として、新世代農協に着目した点である。本書は、新世代農協の最新動向をフォローした先駆的研究となっているが、特に、ミネソタ州レンヴィル郡の穀物・飼料・畜産事業のケース（第八章）では、新世代農協が点から面へと連鎖的に波及する可能性を示唆しており、興味深い。地域発展の主体形成という観点からも、今後の新世代農協の帰趨が注目される。

ところで、米国からの豚肉輸入はこの十年間で急増しており、日本の消費者にとっても米国産豚肉との結びつきは一層深まっている。その意味で、本書は、食肉産業をはじめとする米国農業・農協の最新動向を知る上で格好の書であるとともに、日本の農業・食料研究者にも一読を勧めたい書となっている。

（高知大学人文学部　助教授　岩佐和幸）